

～すてきな人・モノ・アートの冊子～

ふじみ野
ART88

アート発見発信
プロジェクト



Vol.10
2025.1.10

フラーーデザイナー / 阿竹衣香

あたけ きぬか
フラワーデザイナー 阿竹 衣香



フラワーデザイナーの阿竹衣香さんは、ふじみ野市内の自宅に併設されたアトリエでのレッスンを中心に、様々な活動をしています。カルチャーサロンの講師、雑誌へのデザインレシピの提供、モデルハウスの装飾やイベントディスプレイを手がけるなど、活動は多岐に渡ります。

最初の職業は幼稚園教諭。子育て中に携わったドライフラワーリースのデザイン制作販売の仕事をきっかけに、花に関わる仕事をずっとやっていきたいと強く思うようになります。その後、まだ小さかった3人の子どもを育てながらスクールに4年間通い、資格を取得しました。

子どもの成長を見守りながらできる仕事として選んだ自宅でのスクール運営。「KINUCAフローラル・プラッサム」は沢山の生徒に恵まれ共に歳月を紡ぎ、開校22年を迎えました。花のある暮らしの素晴らしさを人と分かち合い、花のある人生を長く楽しむための技術を伝えていきたいと、日々レッスンを開催しています。

柔らかな物越しで、周囲を穏やかな気持ちにさせてくれる阿竹さん。美しいフラワーアレンジの作品は、ご本人の人柄そのものを表しているか

日々の暮らしを
花でもっと楽しく美しく



ようです。そして、本当に花が大好きな人が作っていることが伝わってきます。

生花はもちろん、プリザーブドフラワーや、生花を再現して造られたアーティフィシャルフラワーも、阿竹さんの手にかかるれば命を吹き込まれたように生き生きと見えます。確かな技術があるからこそできることです。

フラワーデザインは自分の思いを表現する場。自分の手で作り、思いが込められているからこそ、生活を豊かに華やかしてくれます。例えば生徒さん達と開催したブーケショー。それぞれが思いを込めてブーケを作り、自ら手に持ってランウェイを歩き、特別な作品展を作り上げました。

「自分の手で作ったものはとっても愛おしくて、見ているだけで幸せな気持ちになるの」と、うれしそうに話してくれる阿竹さん。そんな気持ちをたくさん的人に感じて欲しい。生活の中に少しでも上質なデザインがあると心は豊かになることをたくさん的人に知ってもらいたい。と、思いを語ってくれました。



撮影／大塙 智子

KINUCAフローラル・プラッサム

ブログ

<https://ameblo.jp/kinuka-f-b/>

Instagram

<https://www.instagram.com/kinu.flower/>



文／山田 由季



子どもも大人も楽しみを広げられる

オペラ市民団体

オペラ・リリカふじみ野

オペラの魅力を発信し続ける会長の渡辺さん、音楽指導の小林さん。華やかでありながら、やさしい空気を感じました。オペラの方と対面するという緊張は和み、景色は彩り豊かに、心はおどりました。ふじみ野市を拠点に活動している、市民が企画・運営・上演するオペラ団体「オペラ・リリカふじみ野（旧入間東部市民オペラの会）」。日本語でのオペラ公演を隔年開催し、公演のない年はコンサートを催します。芝居のセリフ、笑いに至るまで日本語なので、初めての方も親しみやすく、リピーターも多い。渡辺さんは、2010年「カルメン」公演から参加のリピーターの一人でもあります。



市民が参加できて、つながりが持てる文化活動ができるないだろうか。1990年代後半に小林さんが行政から相談を受けたことが始まりでした。日本では有名な「第九」などの演奏会もいいかもしれないが、オペラはどうだろう。オペラは総合芸術であり、敷居の高さを感じるかもしれないが、合唱、衣装、大道具、照明など、さまざまな部門が交わるから参加しやすいのではないか。経験の

ない大人も子どもたちも参加できる文化活動としてオペラを推薦しました。演目は、有名であり人気のある「カルメン」。市民200名ほどが集まりました。こんなに楽しいものなら1回で終わらせたくない、続けていきたいということで、今につながっています。2025年7月には、「オペラ・リリカふじみ野」3回目の「カルメン」公演を控えます。合唱練習は和やかな雰囲気の中、一人ひとりが楽しみながらも真剣に取り組んでいる姿があり、感動しました。歌うたびに声の厚みが増すのを感じて鳥肌が立ちました。

オペラは、歌・メイク・衣装・美術・歴史など、いろいろな楽しみ方ができる、人生を豊かにことができる、新しい自分に出会える芸術です。「オペラ・リリカふじみ野」は参加することができる、新しい世界が経験できる、好きなことを見つけられる場所です。練習はどなたでも見学可能なので、感動を共有できたら嬉しいです。



オペラ・リリカふじみ野

電話 080-1036-1893

メール operalilica@gmail.com

HP <https://opera-fujimino.jimdofree.com/>





舞踊に込められたメッセージ

おうらんりゅう ぶようだん はるな

桜蘭流 舞踊団 HARUNA

私たちが目にする美しく華やかな舞台。人が舞い、踊るとき、そこには何が込められているのでしょうか。

桜蘭流舞踊団の家元・春菜さんは舞踊家の母の影響で古典舞踊の中で育ちました。古くから舞踊の世界はしきたりが厳しく重んじられていますが、春菜さんはそれを超えて、自身のさらなる自由な表現に挑戦しようと1995年に舞踊団を設立。若い世代の団員と共に、ギリシャを中心に世



将聖さん

界を廻り、国際公演や文化オリンピックに参加。海外に日本の伝統文化を伝えながらも、日々新しい舞踊の形を模索し、表現する活動を続けています。

現在、若い力で舞踊

団HARUNAの中心を担うのは、将聖さん・聖也さん・咲楽さんの3兄妹。将聖さんは、一族の芸能を愛する血筋を受け継ぎ、古典や民謡が大好きだそう。三味線やお囃子などの伝統文化に造詣が深い全体を牽引するリーダーです。聖也さんは、古典舞踊をベースに持ちながらも、K-POPダンスなどを取り入れ、舞踊団HARUNAに新しい風を吹かせています。身体の表現動作にこだわり、振り付けを徹底するストイックな職人肌。若い世代の団員に多く慕われています。咲楽さんは、春菜さんの花魁の舞台をみて、この舞踊の世界に魅



聖也さん

了されたとのこと。自身が踊ること以外にも舞踊団の動画を作成するなど、伝統文化の発信にも携わり、舞踊団全体の調和をとる癒し系です。

未来を担う3人の

個性がチームとなった舞踊団HARUNAがつくり上げる世界…美と調和が表現されるその舞台をみた人たちの心には、生命の律動に共鳴した、人間本来の美しさと在り方が呼びざまされ、この混沌とした世界に舞踊という形で、言語を超えた大切なメッセージが届けられるのだと思います。

2025年の夏には海外公演が予定されている舞踊団HARUNA。そのメッセージはさらに世界へと拡がっていきます。



咲楽さん

桜蘭流 舞踊団 HARUNA

ふじみ野市鶴ヶ舞1-12-3

電話 090-9848-5030

メール harunaland@yahoo.co.jp

Instagram

https://www.instagram.com/haruna_Japanesedance/

Youtube

<https://youtube.com/@haruna5655>



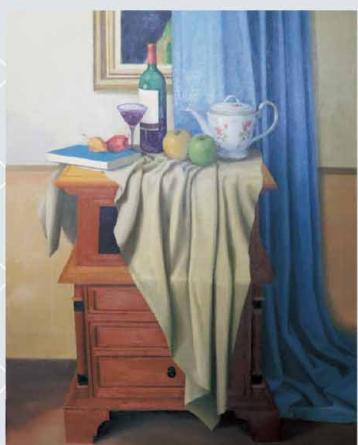


しばた ゆりこ
油絵画家 柴田百合子

油絵画家の柴田百合子さんは、家族をモデルにした人物画や花や果物などを描写した静物画を生み出します。川越市展、埼玉県展、公募団体一水会を拠点に展示活動をしつつ、ふじみ野市内の油絵サークル「オリーブ」、市民大学ふじみ野、公民館の昭和100年大学などで講師として活動しています。

熊本県で生まれ育った柴田さんは、美術部に所属する中学生でした。図書室で西洋美術全集を頻繁に眺め、17世紀・バロック期に南スペインで活躍した画家ムリーリョの作品「乞食の少年」が一番のお気に入りでした。

高校卒業後は、デザイン系の専門学校に進学するために上京。服飾関連の企業に勤めながら独学で絵を描いていました。けれども、「いつか西洋絵画を学びたいと思い続け、進学する希望を捨てきれなかった」といいます。



「今しかない！」と 飛び込んで



子育て中のある日、そんな柴田さんに転機が訪れます。ママ友から社会人でも入れる通信課程の学部のある美術短期大学があると聞いたのです。

「行くなら今しかない！」と飛び込みました。通信課程でも校舎に実際に通って学ばなければならない期間があり、柴田さんは「朝早くから夜遅くまで猛特訓だった」と振り返ります。熊本から母が駆けつけて支えてくれたことも力になり、無事卒業。今、絵を描いているのは、お母様への感謝もあるそうです。

ごく身近な場所で印象に残るものを描きたいという柴田さんは、「気がついたら、日常の中でふと美しいものが目に入る」とれしそうに話します。同時に、「絵を描くことは、対象物や自分と真摯に向き合う寡黙な対話です」と真剣勝負。プロの凄みを感じさせます。クロッキーやデッサンの練習を重ねることも怠りません。スポーツの基礎練習と同じで、その裏打ちがあってこそその作品なのです。公募展やコンクールで受賞を重ねています。

次の希望は個展を開催すること。絵を観た人が自分の思いを重ねて見てくれるのがありがたいそうです。柴田さんの旅は続きます。

柴田百合子

メール deco_pon@ezweb.ne.jp



クリエイター
ながさわ たかこ
永澤 貴子
キッキ
(ki☆ki)



カフェ&コミュニティースペース 「じゃらんじゃらんの実」を家族とともに

幼い頃から絵を描くことが好きだった永澤さんは、阿佐ヶ谷美術学校に入学、ビジュアルデザインを学びました。卒業後、劇団角笛へ入団。人形遣いとしてカラーシルエット（影絵）劇を全国各地で公演しました。劇団での活動で、自然を探求し心を込めて生きた劇が生まれ、観た人の心に届くことを心に深く刻みつけました。

退団後、永澤さんが子どもの頃、陶芸家の母SEIさんが始め、当時、国立にあったカフェ＆ギャラリー「じゃらんじゃらん小舎」の運営に携わりました。お店は2022年、幼少期を過ごした苗間へ移転、義妹ゆき〇さんも加わり、現在の「じゃらんじゃらんの実」を開店しました。一歩入ると、なぜか懐かしさを感じる店内には200冊以上の絵本があり、毎月絵本の会を開催しています。上演芸術の世界でプロとして活躍した永澤さんの読み聞かせは、臨場感に溢れています。他にアーティストの個展、染め織りやハンドメイドのワークショップやLIVEを開催しています。訪れた人が楽しめるよう心を砕いていて、その気持ちがお店の雰囲気をあたたかいものにしています。

また、出会い意気投合した人達とチャリティー劇団を立ち上げ、元気を届けようと演劇活動も

行ってもいます。「じゃらんじゃらん」はインドネシア語で散歩の意味です。人と人が繋がることをとても大切にしている永澤さんにとって、「じゃらんじゃらんの実」は自身の中心です。

現在、放課後児童指導員の資格を取得し、子ども達と関わる仕事をしています。「何かを作ろうと考え手を動かすことは、自身の中からアイデアを生み、それは生きる力になるんです」と語り、自らが率先して行動し、見ている子ども達はその“創造の輪”に巻き込まれてしまうとか。聞いているだけでワクワクしました。

将来、絵本を制作したいと語る永澤貴子さんは、夢を夢のままで終わらせません。自身の心が求める方へ、目指す世界のためコツコツ努力し、これからも楽しく歩き続けて行きます。



左：ゆき〇
(ユキマル：義妹)
右：SEI (セイ：母)

←ドアに描かれた絵と看板の「じゃらんじゃらんの実」の文字は SEI さんの創作です。

カフェ&コミュニティースペース じゃらんじゃらんの実

ふじみ野市苗間596-14

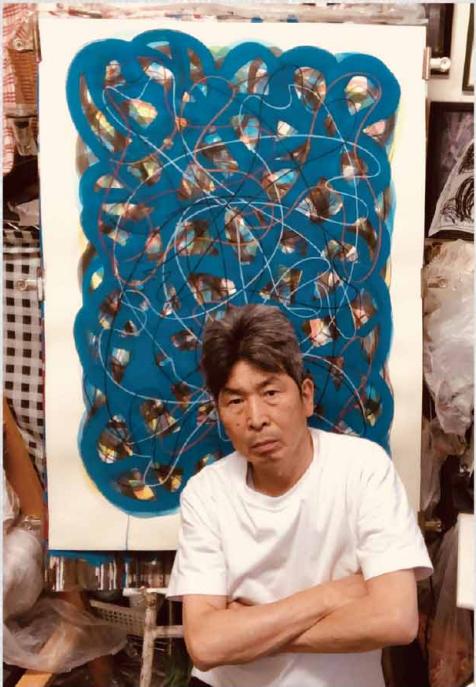
営業：木・金・土 11:30～17:00

Facebook <https://www.facebook.com/jaranjarannomori/>

Instagram <https://www.instagram.com/jaranjarannomori/>

※お問い合わせはSNSからご連絡ください。





なにも考えずに描く

現代美術アーティスト 高橋 寛
たかはし かん

「時間・存在・生命の痕跡を見守る仕事人」。自らをそうしたキャッチフレーズとして表現するのは、現代美術アーティストとして活動する高橋さん。群馬県出身で、東京造形大学を卒業後、広告代理店で活躍しながら、アーティストとしてパフォーマンスや映像、コラージュ作品を中心に世界各国で作品を発表してきました。

近年では、20年ほど前から続けている「変化しつづける線の痕跡シリーズ」に力を入れています。

鮮やかな色彩と円のような、紐のもつれのような図像的ビジュアルをもった一つの線から生まれる表現が目を惹くこのシリーズで生まれた作品群は、一見し



て抽象画のように見えますが、意図的に構成されたものではなく、高橋さん曰く「アルタミナの原人が描いた壁画のようなもの」というように、世界を認識するための表現なのだとそうです。

絵を描くための支持体である紙のサイズは、自身の身体性に沿った最大限の大きさを選定し、画材は無意識の中で動く自らの手のスピードをより鮮明に残せるように水彩絵具や墨汁、色鉛筆を多く使用しています。

市内に構えるアトリエでは、音大進学を考えていたという程に音楽表現にもこだわりを持つ高橋さんらしく、ロックンロールを流しながら創作を行っているといいます。

一つの線から成るランダムの中の均衡、決して完成されることのない永遠に持続する形をした表現は、まさしく自然界、まして宇宙そのものの動きの断片であるように感じます。高橋さんがいう「構成することにハマってしまうと本質から逃げてしまう」という言葉が印象的でした。



また、高橋さんは、スーパービバホーム埼玉大井店2階の「趣味の大型専門店・ARC OASIS」で働くもう一つの顔があります。画材から文具、服飾、玩具などが並び、趣味に欠かせない素材が揃っているこのお店でこれまで経験してきた様々なスキルを「趣味は生活のスペースである」という理念のもと、お客様の相談に親身に寄り添い、市井の人にとって高橋さんの存在が表現活動に欠かせないものとなっています。

高橋 寛

Facebook <https://www.facebook.com/profile.php?id=100020008474052>
Instagram <https://www.instagram.com/kanchiyan511>



～ふじみ野ART88(発見・発信)私たちが目指すもの～

いつの時代も変わらず行われてきた「表現する」ということ。その手法は時の流れと共に変化し、今では多くの人がSNSなどで自分自身の感じる様を表現するようになりました。^{さまざま}表現方法もジャンルを超え、新しい取り組みも試すことが容易になり、AIなど今までの私たちの概念では想像もつかないものが生み出されるようになってきました。しかし、どのような手法をとったとしても、私たちに共通する心の奥に触れるものは変わらないものです。古の人々が手掛けた作品が、今も私たちの心に感動を生むのは、表現されたものが時間も空間も超えたところからやってくるからなのでしょう。アートが鑑賞者の心の奥に触れたとき、新しい可能性がひらかれ、今という時代を超えて未来へと繋がっていく…、私たち一人ひとりの存在は、大きな時代の流れの中の一つのアートであるということを、ふじみ野市内で活躍するアーティスト達は教えて

くれます。

ART88では既成のアートという概念やジャンルにとらわれることなく、人の存在によって表現され繋がりを生み心を豊かにしていくものをアートと位置づけ、ふじみ野市内のアーティストを発見し、その情報を発信してゆきたいと考えています。とらわれない変化のある生きた関係性によって、お互いの心の中に新しいものが生まれ、発展してゆくのではないかでしょうか。皆さまが見つけたふじみ野市内のアートに関する情報も共有し、私たちも一緒に新しいものを作り出していくことを思っています。

この冊子が架け橋となって新たなものや交流を生み、ふじみ野市全体が多様性に満ちた一つの美しいアートとして存在すること…そして、その豊かな色彩や響きが、世界中に広がってゆくことを私たちは願っています。

市民編集員／井上芳枝・臼村さおり・尾澤景子・寺内みか・古屋崇久・山田由季(50音順)

このプロジェクトは上記6名の市民編集員により企画・取材及び編集を行いました。



本文に見やすいユ
ニバーサルデザイ
ンフォントを採用
しています。



ART88のパック
ナンバーは、こち
らからご覧いた
だけます。

ART88をいっしょにつくりませんか

アート発見発信プロジェクトでは、市民編集員を募集しています。

この冊子は、様々な分野の有志が集まり、それぞれの感性でふじみ野市の素敵な人々やモノ、活動を綴ります。音楽や芸術分野、創作活動などでご活躍の方々との出会いやインタビューを通して、彼らの「感性」や「思い」に触ることができます。ご興味のある方は、ぜひふじみ野市文化・スポーツ振興課へお問合せください。

発行/ふじみ野市文化・スポーツ振興課
編集/アート発見発信プロジェクト市民編集員
〒356-8501 埼玉県ふじみ野市福岡1-1-1
TEL: 049-262-8124
メール: bunka@city.fujimino.saitama.jp
紙面デザイン／有限会社萩原印刷 ogichef@dream.com
表紙作品／阿竹衣香「花のワルツ」(撮影／大塙智子)